

Title	バンダマンナ・サガ : 欺かれた首領たちの物語
Author(s)	菅原, 邦城
Citation	大阪外国語大学学報. 39 p.139-p.161
Issue Date	1977-03-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80665
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

バンダマンナ・サガ

—— 欺かれた首領たちの物語 ——

菅 原 邦 城 ・ 訳

BANDAMANNA SAGA

Translated from the Old Icelandic

by Kunishiro SUGAWARA

Bandamanna saga, i.e. Saga of the Confederates, is the greatest among the few satiric works in Old Icelandic literature. This “is a comedy, but a venomous comedy, and it seems to be an instance of conscious satire against the chiefs” (E. Ól. Sveinsson: “The Icelandic Family Sagas and the Period in Which Their Authors Lived,” in *Acta philol. scand.* Vol. 12, p.86). This saga is preserved in two medieval copies, now kept in Copenhagen as AM 132, fol. (*Möðruvallabók*, from the 14th cent.) and Gl. kgl. Saml. 2845, 4to (from the 15th cent.). Both of them are edited by Guðni Jónsson and are included in *Íslensk fornrit* VII, pp. 291–363 (Reykjavik 1936; repr. 1964). The Old Icelandic text used for our translation is, mostly for brevity’s sake, that of the shorter fifteenth-century MS. To make the story more readable, however, there are amendments made according to the *Möðruvallabók*, and supplementary phrases and notes originally not found in either MS but added by the translator. These are distinguished by putting the former in brackets and the latter in parenthesis. These additions are, to save space, restricted to the minimum.

This excellent saga is actually the last work of its kind to be translated into Japanese, following *Lokasenna* and *Ölkofra tháttr* (about Japanese translations of these works, see Vol. 36 of our Journal, pp. 61 f.).

I. オーフェイグという男がいた。彼は北部地方、ミズフィヨルドのレイキルに住んでいた。彼はスキーズィの息子で、母親はグンラウグといい、彼女はスコルズのオーフェイグの娘であった。オーフェイグは結婚していて、妻はソルゲルズといい、ヴァーリの娘だった。これは名門の出の女で、たいへんな女丈夫であった。オーフェイグは非常に賢い男で知恵者だった。しかし、金には楽をしておらず、大きな土地を持っていたが、動産はそれよりも少なかった。彼は誰にたいしても食べ物を楽しみはしなかった。彼はアースゲイルサーのステュルミルのスィングマン(部下) だった。ステュルミルはソルゲイルの息子で、当時、北部地方では最大の豪族であった。オーフェイグには、妻との間にオッドという息子がいた。これは美男子で有能な男だった。彼は父親から余り愛されてはいなかった。彼の方も家では、自分の気の向くこと以外、仕事をしなかったのだ。ある男がこの一家で育てられていて、ヴァーリという名前だった。彼は美男子で人望があった。このような具合で、オッドが12歳になるまで、しばらく時が経っていった。父親のオーフェイグは息子に言葉をかけることを余りせず、彼をたいして愛もしなかった。オッドについて、北部地方では彼以上に能力のある男はいないだろうと言われていた。

或る一日、オッドは父親に話しかけ、自分に財産を分けてくれるように頼み、家を出ていくつもりだと語った —— 「父さんはおれを一人前に扱ってくれないし、おれはおれで父さんの役に立たないという有様だ」とオッドは言うのだった。オーフェイグが答えて言った。彼がこれまでしてきたことから見て自分は大して財産を分けてやれない、どれだけの援助をしてもらえるかお前は分るだろうと。オッドは、自分はそれを当てにできないんだと言った。こうして、二人は別れた。次の日オッドは家を出るが、彼は板張りの壁から漁網をとり、また漁道具全部と12エルのホームスパンを持っていった。彼は誰に挨拶することもなく出ていった。彼はヴァトンスネスに行き、この土地で漁場にいた者たちの仲間に入った。そして彼らから、貸付けや賃貸しで必要な援助を受けた。しかし彼らは、オッドの立派な家柄と彼自身の人望のあることを知ると、彼に掛売りまでするようになって、彼は何でも掛けで買い、その年は彼らと一緒に過ごした。彼と一緒に漁をしていた者たちの漁がいちばん良かったと言われている。

オッドはそこに3冬、3夏いた。こうして彼はその頃には負債を残らず返済して、なおかつ売る商品がたっぷりあるという風になっていた。その間、彼は父親を一度として訪ねたことがなく、二人はたがいに相手と何の関わりもないかのような振りをしていた。オッドは仲間うちで人望があった。さらに、彼は北の方のストランディルへ商品の運送を行なうようになって、大きな船の権利を買い、北部地方から木材と鯨と魚の船荷を運んだ。こうして彼の財産は大きくなっていった。しばらくこの状態が続いた。その土地に彼が来たときは12歳だったが、今は15歳になっていた。彼の財産はどんどんふえていって、とうとうその船を自分ひとりで所有するようになり、毎夏ミズフィヨルドとストランディルの間を往き来した。いまや彼はこの商売では満足できなくなった。そこで干魚を仕入れて外国に出かけるが、それもうまくいって財産と人望を獲得するのだった。この仕事にしばらく従事し、ひとりで商船を一艘所有し、また積荷の大部分を自分で所有

するという風にまでなった。こうして彼は交易航海を続けて、大金持で有名な人物になった。彼はいつも外国では高貴な人々の保護をうけ、また尊敬された。その頃、交易航海でオッドと並んで裕福な者はだれもいなかったと言われている。彼はまた他の者たちよりも運がよかった。彼はエイヤフィヨルドよりも北に、フウィーターよりも西に行くことは一度もせず、もっともひんぱんにフルータフィヨルドに行った。

Ⅱ. ある時のこと、オッドはフルータフィヨルドに入り、冬の間はここにいるつもりだった。このとき彼は友人たちにそこに定住するように求められ、その頼みを承知して、定住することにした。こうして彼はミズフィヨルドのメル（今のメルスターズル）に土地を買って、ここに屋敷を建て、程なくしてこの屋敷で立派な人物になる。そして、彼が行なっていた航海よりも今の方が価値の劣るものだと思う者は誰もいなかったと言われている。北部には、オッドほどに金持の者はいなかった。彼は大多数の他の者よりも気前がよく、自分の近隣にいる者の誰にたいしても助けを惜しまなかった。しかし、父親のオーフェイグにたいしては一度として援助も骨折りもせず、彼のことは目につかないかのような様子だった。オッドは自分の船をフルータフィヨルドで陸に揚げた。この国の人でオッドと同じ程に財産のある者はいなかったが、彼はこの国でもっとも豊かな〔者3人を合わせた〕よりも少なくない財産を所有していたろうと言われていた。金と銀と家畜と土地など、あらゆる類で彼の財産はおびただしかったのだ。オッドの身内ヴァーリは、彼が国内にあらうが外国にあらうが、どこでも彼と一緒にだった。

グルームという男がいた。彼は北のスクリズンセンニに住んでいた。そこはビトラとコッラフィヨルドの間にある。彼の妻はソールディースといい、彼女は〈雄けわたがも〉アースムンドの娘で、グレットィルの姉妹だった。この夫婦の息子はオースパクといった。彼は体の大きい、力の強い男であり、とても手に負えない男で、はやくから商品の運送に従事して暮していた。

ある夏、オースパクがミズフィヨルドに来て自分の持ち物を売った。その秋も大分たった或る日のこと、オースパクは馬でメルに行ってオッドに会った。二人は話をし、消息をたずね合った。オースパクが言った「オッドさん、あんたについては良いことしか言われていないんだ。みんなはあんたをほめているし、あんたと一緒にいる者はみんないい境遇にいると思っている〔わしは、自分にもそうなって欲しいと思ってるんだ。あんたの手もとに移ってきたいのだが。〕」オッドが言った「あんたは余りほめられていないし、人望もない。また悪賢そうな顔つきをしてるな」オースパクは答える「他人の言うことではなくて、あんたが自分で試してみても判断してもらいたい。わしは、あんたから自分の食物をもらわないが、一緒に住んで、あんたが（わしのことを）どんな風に気に入るか知りたい」オッドが言った「あんたの身内は自尊心の強い人たちだ。このことをあんたがそんなに熱心に求めているのでは、一冬ここにいなさい」オースパクはそれを承知して礼をいった。彼は秋のうちに屋敷に移ってきた。彼はオッドをよく助けて、仕事のことで言うことをきいて多くの仕事をし、オッドはそんな彼が気に入るのだった。こうしてその年が過ぎて

いった。春になるとオッドはオースパクに自分のもとに（引続いて）とどまるように勧め、そうする方が余計いいと思〔うと言〕った。相手もそれを望んで、この同じ屋敷の経営に多忙をきわめた。そうしてこの屋敷はいやが上にも栄えて、どのアイスランド人の経営もオッドのそれよりも盛んだとは思われなかった。人々は、一つだけオッドの名声に欠けているものがあると思うが、それは彼がゴゾルズ（主領godíの権利と権力）を所有していないことだった。その頃は、新しいゴゾルズを設け、また買うことは習慣だった。彼もそうして、間もなく彼のもとに〔スィングマンたちが〕集まってきた。というのも、誰もがオッドのもとに來たがったからだ。こうして、しばらくは平穩で何事も起らなかった。

Ⅲ. オッドはオースパクに満足していた。彼は腕も立派だし、大仕事もでき、屋敷は彼を必要としていたのだ。二度目の冬がすぎ、オッドは〔オースパクに〕前の冬よりも満足し、彼が多くのことを取りしきるに従って、それだけますます満足した。秋に彼は山から羊を駆り集めたが、放牧の結果は申し分な〔く、一匹の羊も失われることはな〕かった。オッドは羊を誰よりも多く所有していた。オースパクも自分の羊をいくらか持っていたが、彼はよく気をつけていて一頭も失わなかった。

こうして冬が過ぎていき、春になると、オッドは友人たちに自分は夏に外国に出かけるつもりだと話し、屋敷は身内のヴァーリに任すと語った。ヴァーリが答えた「オッド、それは荷が勝ちすぎるよ。あんた自身がいる時はうまくいってるけれども。わしはあんたと一緒に外国に行きたい」そこでオッドはオースパクに尋ね、屋敷を引受けてくれるように頼む。オースパクが言った「わしには、このように大きな不動産を采配する才覚はない」オッドは更に相手に執拗に言ったが、オースパクは断る。それでもとうとうオッドの決定に任せることになったが、オッドはオースパクに自分の援助と保護を約束した。オッドが彼に言うには、彼はもっとも立派で人望もある人物になるように自分の財産を扱ってもらいたいという事だった。彼が自分の財産を一番よく守ってくれる、またそう出来ることは、自分がこれまで見てきた事から判るとも言った。オースパクは、言われたようにしようと言った。こうして二人の話は終わった。

オッドは旅の準備にかかって船の仕度をし、商品を積込ませる。それは、たっぷりであった。このことは直ぐに人々の耳に入り、大いに噂された。オッドは準備に長い時間を必要としなかった。ヴァーリが彼に同行する。オッドが仕度を済ませると、人々は船まで彼について行った。オースパクは、オッドと話すことが沢山あったので、誰よりも長くオッドについて行った。間もなく船に着くという時にオッドが言った「手筈を決めてないことが一つ残ってる」「それは何ですか」とオースパクが訊いた。「わしのゴゾルズについて何も決められてない。わしは、あんたに任そうと思う」オースパクが言う「それはまずい。わしはそれをやる能力をもっていないし、またもう自分でよく支配できる以上のものを引受けもしているので。一番当てになる賢い人のあんたの父親以上に、これのはまり役は誰もいない」オッドは、自分は父親にゴゾルズを任せない

だろうと言った——「わしは、あんたに任せたいのだ」オースパクは断わる。するとオッドは、もし彼がゴゾルズを受取らなければ自分は怒るぞ、と言った。〔そして、彼らが別れる時オースパクはゴゾルズを受取った。〕こうして、オッドは外国に向い、航海はうまくいった。

一方、オースパクは屋敷に帰っていく。オッドがこの男に大きな力を与えてしまったようだといふことが、広く噂に言われた。オースパクは夏に（大）民会に出かけ、そこで巧みに振舞い、自分が法律によって拘束されていることをすべて処理し、相当の面目を施こして民会から帰っていく。彼は自分のスィングマンたちに対して物惜しみをせず、また彼らの問題をおろそかに放っておくことをしなかった。彼は隣人の誰にたいしても親切だった。屋敷は、以前に劣らぬ名をあげていると思われ、さらに管理が行き届き、隆々と栄えた。夏も大分すぎた時、かれは秋期民会（leid, 地区民会）の神聖を宣言するが、それを（主領として）申し分なく行なった。秋がくると彼は山に上っていくが、沢山の羊を駆り集めることが出来、オッドのも自分のも一頭として欠けていなかった。

IV. 秋に、オースパクが北のヴィーゾィダルに行つて、スヴァラという女のもとを訪ねるということがあった。彼は下にも置かぬもてなしを受けて、そこに滞在した。彼女は若くて美人だった。彼女は彼に自分の農場の経営の面倒をみってくれるように頼んだ「あなたは有能な農場主かどうかっています」彼は頼まれたようにした。この二人はおたがいが気に入り、やさしい目で見合つて語り合い、とうとうオースパクが、彼女の結婚について決めるのは誰なのかと尋ねるのだった。彼女は言う「あたしは、誰よりもラックスダルの主領の（賢者）ソーラリンといちばん近い身内です」

彼はコッルの息子のホスクルの息子のオースパクの息子で、母親はクヴェルド＝ウールヴの息子のスカッラ＝グリーンムの息子のエギルの娘ソルゲルズだった。それから、オースパクはソーラリンに会いに出かけ、そこで温かく迎えられた。彼はソーラリンに自分の用向きを切り出した。ソーラリンは言う「わしはあんたと親類関係に入るのを望むことは出来ん。あんたの様子については多くの噂があるのでな。（あんたと親類になるのは）わしの考えではない。そしてわしの見るところ、あんたとは二つの互いに食い違うことを同時にする訳にもゆかない、二つのうちどちらかをすべきだ。一つはスヴァラの屋敷の経営を引受けて彼女をこちらに移らせること、もう一つはあんたら二人が好きなようにすることだ。それ以上わしは関わりを持ちたくない。これを、わしは自分の決定とする」そうして、オースパクはそこを去ってスヴァラに会い、彼女にことの次第を告げた。そこで二人は自分たちの決定をして、彼女は自分で彼と婚約した。その後ふたりの結婚式が行なわれ、彼女はメルにいて、そこにオースパクと一緒に住んだ。

こうして冬が終っていき、春になると、オッドがアイスランドに帰ってきて、フルータフィヨルドに入った。彼の航海は上首尾で、財産がふえた。彼はわが家に帰って、不動産を調べ、それがよく守られてきたと思え、とても上機嫌だった。こうして夏が過ぎていき、ある一日オッドは、

オースパクがゴゾルズを自分に渡していても良かったろうと思うと言った。オースパクが答えて言った「そうだな。それはわしも返したいと思ってるもので、それを所有はしてきたけれども、もともとわしには所有できるものでなかったのだ」オッドが言った「わしの聞いているところでは、あんたはそつ無くうまくやってきたと言うじゃないか」オースパクが答えた「けれどもわしは、ゴゾルズを公けの集会か聖別された秋期民会か他の民会で譲り渡すのが一番ふつうだと思う」オッドは、それならそれで結構だと言った。こうして夏が経っていった。秋期民会の開かれる朝、オッドは目をさますと周りを見まわすが、部屋の中にあまり人がいないのを目にして、すぐに飛び起きた。その時はオースパクがすでに出かけた後で、沢山の者が彼について行っていた。それをオッドは奇妙なことだと思ったが、そのことを余り口に出さず、仕度をした。男たちが何人か彼に同行する準備をする。そして彼らは民会に出かけていった。彼らが会場に着いた時、そこには沢山のひとが集まっていたが、多くの者は帰り仕度をしていた。そしてその民会は聖別されたものだった。オッドは〔非常に驚き、〕この民会の進め方は非常に悪らつだと思ふのだった。その後参集者たちは帰宅し、何日かが過ぎていった。そして、二人の間には何も起らなかった。しかしオッドは、オースパクが自分の名声をかなり手に入れて、彼が身の程以上の人物になる気であるのだと考え、オースパクに与えた大きな名誉について自分は受けてしかるべき報いを受けていないと思った。

ある日のこと、オッドが食事をしていて、オースパクがその向い側にいたが、そんなことは予想だにされなかった時、オッドが食卓から飛び上って手に斧を握り、それをオースパクにむけて、彼に、手を差出して（同意して）自分にゴゾルズを引渡す（か、攻撃を受ける）かの二つのうち一つをしろと言った。オースパクが言った「あんたが本気でゴゾルズを欲しがっているからには、脅して取ろうとしなくても、また脅し以外のことがわしのやった仕事に対してはもっと相応しいのだけれども、あんたのゴゾルズは返してやるさ。」そう言って彼は手を差出し、相手にゴゾルズを引渡した。オッドが言った「わしは、あんたのやった仕事にたいして十分に支払われたと言ってよい程の名誉をあんたは味わってきたものと、考える」しかし、（この点で）二人は別々な考えだった。それから屋敷の手入れは全然されなくなり、オッドはそれを知らないような振りをしていた。ある日、オースパクは屋敷を出ていく仕度をし、自分の荷をこしらえて妻をつれて出ていき、オッドに会（って別れを告げることもせ）ず、スヴォルスタズィル（スヴァーラ屋敷）に行つて、そこに住んだ。オッドは何事も起らなかったかのように振舞った。

秋に人々がメルから山に出かけたとき、オッドの羊の駆り集めが以前とは非常に違うことになったと、言われている。彼の一番いい去勢羊60頭が消えてしまっていたのだ。それで人々は山を捜した。オッドが羊については誰よりも運がよかったので、みんなはこのことを奇妙だと思った。この時、別の地区に行ってしまったのではないか、雪の中に埋もれてしまったのではないか、或いは誰か人の仕わざではないかと、様々なことが想像された。そして終いには騒がれなくなったが、それでもこれは一体どういう事なのだろうと、みんなは大いに話しあつた。でも、オッドが屠殺用

の羊に不自由することはなかった。

オッドは冬の間ずっと口をきかなかった。彼の身内のヴァーリは、何のために彼がそんなに不満なのだと尋ねた —— 「あんたは羊のいなくなった事をひどく気に病んでいるのか。その事でくよくよしているのならば、あんたも余り偉い男じゃないな」オッドが言う「その事でくよくよしているのじゃない。わしは、誰が盗んだのか自分が知らないことを、とても良くないと思っているのだ」ヴァーリは言った「あんたは、それが（盗まれた事だと）はっきりしていると思うのか。じゃ、あんたはどの辺に目ぼしをつけているんだ。」「隠しだてはしない」とオッドが答えた。

「オースパクのいる所だ」ヴァーリは言った「あんたたちの友情は、あんたが彼に自分の財産の管理をさせた時よりもまずくなってるのか」オッドが答えた「あれはとんだ間違いだったが、それでも今はましになってる」ヴァーリは言った「大勢の者が、あれは奇妙に思われると言っていた。しかし今は」とヴァーリは続ける。「わしらは、あんたが余り急に問題を彼にぶっつけて彼が断罪されることにならないようにして貰いたい。あんたたちの友情はすっかり駄目になったというのが、世間の噂だ。〔一体どうなっているのかという判断は〕わしに任すと約束しようじゃないか。そしたら、わしは（先ず）オースパクが羊を盗んだのかどうか確かめよう」オッドが言った「あんたはどういう風にしてそれを知ることが出来るんだ？」ヴァーリは答えた「わしはそっちこっちで広く品物を集めてこなくちゃならない。そして、あの地区をまわってオースパクのところにも訪ねていく」オッドが言った「あんたの好きなようにやったらいい。これはそう大勢の者に出来ることじゃないが、それも、どちらかと言えば、うまく行きそうもないな」こうして、彼らはこのことを約束した。

それからヴァーリはヴァトンスダルやランガダルの地区をまわる旅の準備をした。彼が来たことは、誰にも大きな出来事だと思われた。ある晩、彼はオースパクのもとに来たが、オースパクは彼をよろこんで迎えた。オースパクは上機嫌だった。ヴァーリは次の日そこを去るが、オースパクは彼を屋敷の外まで案内して、オッドのこと、オッドの様子をきくのだった。ヴァーリは、彼の具合は上々だと答えた。オースパクはオッドをほめ、非常にすぐれた人物だと言った ——

「冬にオッドさんが損害を受けたそうだが？」ヴァーリは、それは事実だと答えた。「それについて何て言われてますか」とオースパクが言った。「オッドさんはいつも羊については運のいい人なのに」ヴァーリは答えた「それは色々な風に言われている。ある者は湿原に迷い込んでしまったと考えるし、他の者は他の地区に追っていかれたと考える、また別の者は誰かひとの仕わざだろうと考える。」「いろんなことが噂で言われてるんですね」とオースパクが言った。「そうだ」とヴァーリは言う。「いろんなこと、そして良くないことがだ。この問題については多くのことが想像されている」「それは考えられることです」とオースパクが言った。「今はこうだ」とヴァーリが言った。「この事についてあんたと話をした以上、あんたがこれに絡んでいるのは有りそうもないことじゃないと考える人たちもいることは、隠しだてしない。あんたとオッドが急に関係を切った時のことを一部始終、そして羊が見えなくなったのはその少し後だったことを、

みんな一人残らず覚えている』オースパクが言う「あんたがこんな事を言うなんて考えもしなかった。もしあんたとこんなに親しい友人でなかったなら、わしはこの仕返しを思いっきりしたろうよ」ヴァーリは言った「オースパク、あんたはそれを隠す必要はない。わしはあんたの屋敷の様子を調べてしまっているの、あんたが隠しおおせないという方がよけい考えられることだ。あんたが家畜を、自然だと思われるよりもはるかに多くふやしているのを、わしは見る事が出来る」。「それは証明できないだろう」とオースパクが言った。「わしらの友人がこんな風に言うからには、敵がどんな風に言うか、わしには分らない」ヴァーリは言った「この事は、わしは敵意から言ってるのじゃない。あんたと二人だけで話してるのだから。あんたがわしの言うようにして、賛成するならば、これについてわしは方策を考える。それで、あんたにとってひどく悪くはないだろう。わしはこの辺りをまわって自分の品物を売ってきたが、わしは、あんたが（それらの品物を）譲りうけて、それで屠殺用の羊を買ったと言おう。それを疑う者はないだろうし、わしは、もしあんたが忠告をきいてくれるならば、あんたにとって不面目にならないように事を処理する」オースパクは、自分はそれに同意できないと言った。「それでは、もっとまずい事になるだろう」とヴァーリが言って、二人は別れ、ヴァーリは帰っていった。オッドはヴァーリに、何を確かめたかと尋ねたが、彼はそれについては何も言わなかった。「いい」とオッドが言った。「もう隠す必要はないよ。方策があったら、あんたは隠したろうが、もうわしにはオースパクが盗んだのが分った」

冬の間は何事もなく平穏だった。そして春になって召喚日が来ると、オッドは総勢20人で出かけて、オースパクの住んでいる屋敷に遠くない場所まで来た。その時ヴァーリが言った「オッド、あんたたちはここで馬を下りて草を喰わせろ。わしはオースパクの所まで走って行って彼に会い、彼が和解する気があるかどうか見てこよう。彼がその気ならば、訴訟を起す必要はない。そしてあんたは、彼との昔の友情がそれだけの価値があったと考えるんだ」「わしは、自分がそうしなければならぬのかどうか分らない」とオッドは答えた。ヴァーリはすぐに出かけて、スヴォルスタズビルに来了。屋敷では、外に出ているものは誰もいなかった。戸が開いたままになっていて、ヴァーリは中に入っていく。玄関口の内は暗かった。彼は、男が自分に飛びかかってきて両肩の間に斧を斬りつけるまで、何にも気づかない。それはオースパクだった。ヴァーリは言った「おまえは、なんて運のない男なんだ！罪もない、このおれを傷つけて！逃げろ、自分を救うんだ！ここにぐずぐずしていれば、死があんたを待っている。オッドがこの屋敷のそばまで来ており、あんたを殺すだろう。自分の命を救うんだ。奥さんをオッドに会いに行かせろ。彼女に、おれたちは和解した、そしておれは自分の金を取りたてに地区へ出かけて行ったと、オッドに言わせるんだ」この時オースパクは言った「これは最悪のことになってしまった！この事はオッドにしてやろうと思ったんだ」それでも彼は妻をオッドに会いに行かせ、彼女は彼に、ヴァーリとオースパクは和解した、オースパクはその悪事を認め、すべてをヴァーリに一任したと言った——「そして、あなたには家に帰ってくれるように言っていました」オッドはそのようにして、メルに

ひき返して、自分に言われたことを信じるのだった。

次の日ひとびとは、おびたしい数の者がメルの屋敷に向ってくるのを見た。オッドはそちらの方に向って行って、それがどういう事なのか、見てとるのだった。彼らはヴァーリの死体を運んで来たのだ。こうして、事件は余すところなく明らかになり、オッドがそれを知ってしまった。これは非常に由々しい出来事で、オッドはそのため大いに機嫌を悪くしてしまった。自分が屋敷の近くで休んでいたのに、養い兄弟は（その屋敷で）殺されていたのだった。このために、彼は多くの者たちから非難をうける破目になった。一方、オースパクは姿をくらまして、彼のことは何ひとつ聞かれなかった。

V. オッドはこの問題を（大）民会に持出す用意をして、隣人の中から 9 人を証人を選び、同行させることにした。ところが、その証人の一人が死亡するということが起った。しかしオッドは、代りに別の隣人を証人に決めた。その後かれらは民会に出かけた。オッドが十分すぎる程の必要によって自分の養い兄弟のために訴えを起さざるを得ないというのが、人々の意見だった。オッドは自分の小舎（民会開催中滞在する仮屋）に掛物をかけて住めるようにして、大勢の者を手もとに集めていた。

時が経って裁判の日となる。オッドは法廷に出かけて行って訴えを起した。彼が被告側に弁護を始めるように求めた時、ステュルミルとソーラリンは（支持者の）一団をつれて法廷にほど近い所に坐っていた。この時、ステュルミルがソーラリンに語りかけた「オースパクの訴えが起されているのが聞こえるか。」「聞こえてる」と相手は答えた。「それで」とステュルミルが言った。「オースパクのために何か弁護するつもりか」「いいや」とソーラリンは言った。「わしはこれに全く関わりを持たん。ヴァーリのような人物のために訴えを起す相当の理由と十分な必要性がオッドにはある。しかしオースパクは、わしは立派な男だとは思わん」「たしかに」とステュルミルが言った。「あの男は立派じゃない。だが、それでもあんたは（親戚として）彼に対して何がしかの義務を持ってる」「そうだけれども、わしはそんなこと気にかけない」とソーラリンが言った。ステュルミルは言う「もし彼が追放に定められたら、わしらにとって面倒になる事は、あんたも考えられるだろう。それに、これは弁護可能な訴訟だ。あんたもわしもこの訴訟に欠陥を認めることが出来るのだから。オッドは手続きを間違えて、死んだ証人の代りに別の証人を自分の地区で決めて連れてきているが、これは民会でやらなくてはいけなかったことなのだ。それで、この訴訟には欠陥があるんだ」ソーラリンが言った「それにはずっと前に気づいていたが、オッドの訴訟の必要性はとても大きく思えて、彼に反対する気なのかどうか自分では分らない位だ」ステュルミルは言った「わしは、この問題はあんたに一番関わりがあると思う。また、明らかに弁護すべき問題である事をあんたが承知しながら訴訟が進められたとしたら、この事であんたは恥をかくぞ。そして、オッドが北部には何かに価値する者が奴ひとりだけでなく他にもいることを知っていても悪くないのは、大いに重要なことだ。奴がわたしたちとわたしたちの部下を踏みつ

け、奴のことだけが話され、そうすることで、あいつは己れのスینگマンを確保し、わたしたちを圧倒するのだ』そして、彼はさっと立ちあがって法廷に向っていき、そこで言った「ここに、オースパクの弁護をしようとする者たちがいる。オッドは訴えの手続きを間違えており、この訴訟には欠陥がある。それで今は選択するものが二つある。これまでしてきたままでこの訴訟を取下げるか、或いは、わたしたちが弁護をして法律問題でいくらかよく知っていることから利益を得ることにするかだ』そしてオッドに、どこに欠陥があるのか語った。するとオッドは黙ってしまい、自分の立場が絶望的になったと思ひこみ、そこを去って自分の小舎に帰っていく。

小舎の間の小道をオッドの一行に向って一人の男がやってきた。年寄りではぼよぼよしていて、黒い頭巾つきマントを着ていたが、それには片方しか袖がなく、手に曲った杖を握り、それには石突きが付いていた。〔やって来たのはオッドの父、老人のオーフェイグだった。〕彼が先にオッドに話しかけて言った「おまえの問題はあつという間に、また見事に片づけられたな。訴えがみんなあんな風ではお前は名誉な立場に置かれたことにならん。オースパクは追放されたのか？」オッドは答えた「やつは追放にされているだろう」「だろうだって？そうなることに何の疑いがあるか？奴には十分な理由があるに。奴はおまえの養い兄弟ヴァーリを殺して、お前の財産を盗んだじゃないか」「それは誰にも否定できないことだが、わしの訴えの起し方には欠陥があって、準備が間違っていたんだ」オーフェイグが言った「どうして、お前の訴えに欠陥があったんだ？考えられもしないことだ。しかし、お前には、法律にくわしく通じることよりも旅や金儲けの方が大切なのかも知れんな。だが、お前が自分だけで十分だと思って他人に助けを求めない時には、お前の思い違いは高くつくことになるかも知れんぞ。わしは、お前が間違った訴え方をしたのは分っていたが、お前は自分が立派すぎてわしなどには尋ねられないと思っていた。だが、わしはお前が不面目な目にあうことになるのを知っていた。お前はこのわしを他の誰よりも一番低く評価してきたのだ」オッドは言った「どうやら父さんの望み通りになるようだ」オーフェイグが訊いた「わしがお前と一緒にまだ何かしたいとしたら、どうなる？少しでも良くなるとしたら、お前は金を惜しむか？」息子は言った「それに金の糸目はつけないよ、もし前に起ったような不面目を受けることがないんならば。父さんから何かためになる事を一度もしてもらったことが無かったんで、父さんが間違いを正してくれるなんて変な気がするな」オーフェイグが言った

「もしお前が望むんなら、少々金で一か八かやって見てもよい。そしたら今度は、わしはお前に、前に起ったものと同じなほどに不面目を受けることはさせん。お前が出てきたとき、訴訟はどこまで進んでいた？」息子は父親に、「わしらが法廷を出たときは」まだ弁護の演説はされていなかったと答えた。オーフェイグが言った「そうなら、お前が知らないまましたことは何よりもよかった。それだけがこの訴訟の救い道だ」

VI. それからオッドは小舎に帰っていった。一方、オーフェイグは〔広原をあがって行って〕法廷の場にいき、北部地方住民の裁判官たちのところに来て、裁判がどんな具合になっているか尋

ねるのだった。いくつかの訴訟は裁定が下されているが、他のは訴えの要旨が述べられるところだという答えだった。オーフェイグは言う「わしは法廷の中に入れてもらえまいかね？」それはすぐ許されて、彼は（中に入って）腰を下ろし、そして話した「オッドの訴えはどんな風になっているのかな？ オースパクは追放されたのかね？」彼らは答えて、オースパクは追放にされなかったと言った。オーフェイグが尋ねた「それは一体どういうことかね。あの男はヴァーリを殺したんじゃないのか、その前には泥棒をしたんじゃないのか」彼らは答えた「それは否定されておらん。また、その方がいいと考えられているのでもなくて、訴えに欠陥があって、訴えの起し方が間違っていたのだ」オーフェイグが言った「これらの問題よりも価値があるっていうのは、一体どんな欠陥なのかね。皆さんは宣誓をしたのかね」彼らは、したと言った。「そうだろう。だが、あんた方はどんな風に宣誓したのかね。それが法律によれば最も正しくて真実であるとわしが知っている書物にかけてわしが誓うように、宣誓したのじゃあるまい？ 皆さんはそうに言うべきだったのに。だが、最も悪質な男、そういう裁定にふさわしい者を、追放といかなる援助をも禁止する刑に定めることより、もっと真実で正しいことが外に何かあるのか。何よりも法律によって、皆さんはそうに言うべきだった。それは少し厄介だ。だが、考えてもみなされ。ただ宣誓の形式に合うだけのことと、前に言った二つのことと、どちらが余計に価値あることなんかを。しかしわしは、神さまにも人間にも名誉になる方策をとる方が実に当を得ていると思う。もし皆さんがそうするならば、正しい宣誓をして、その裁きに似つかわしい者を有罪に定めることは至極はっきりしたことだ。裁きに値する者たちを追放に定めないことは責任のある由々しいことだし、人々はそのことで皆さんに向って賛成の拍手をするだろうて。わしは、裁判の席に坐っている皆さん一人ひとりに銀1エイリル、訴えの要旨を述べる人たちには4エイリル進呈しよう。というのは、無実の者を殺したり盗みを（したことが）確信されている悪党どもを放って置かないことは何にもまして急を要することだからじゃ。ここで議論がされるだろうが、わしはそれに入れてもらおう」オッドがやって来ればその訴えを裁くと彼らが約束するように、オーフェイグは話すことが出来た。

こうしてオッドを迎えに人がやられ、彼は法廷に現われるが、その頃に（大多数の）人々はすでに自分の小舎に帰ってしまっていて、まさかそうなるだろうと思う者は一人もなかったのに、彼らはこの訴えを取上げて、オースパクは追放に定められたのであった。彼らは小舎に帰って、その夜は過ぎる。そして次の朝、彼らは（法律事項の告知をする場所である）法の岩に集まり、そこでオッドが立って言った「オースパクという男は、北部地方裁判所で昨晚追放に定められた」そして、追放になった者の人相特徴などを述べるが、それは堂々たる話しぶりだった。

VII. 事態が妙な風になってしまったものだと思われた。ステュルミルが口火を切った「ソーラリン、何と言われたか聞いているか」彼は答えた「聞いている」ステュルミルが言った「わたしたちは異にはめられたんだ。他の賢い連中が奴といっしょにこれにかかずらわってるぞ」「その通りだ」

とソーラリンは言った。「だが、宣誓に幾分救い道がある」。「それは何だ」とステュルミルが訊いた。ソーラリンは言う「彼らは法廷に金を持ち込んだ。それをやった連中と受けとった連中は法律に違反してる」ステュルミルが言った「わしたちが元通りに出来るかも知れない望みもあることになるな」。「そうとんとんとはうまく行かんだろう。まず12か月経たなけりゃならん。友人と身内に会うことが、今すべきことだ」そして、彼らは小舎に帰っていった。次の者たちが集まって話し合った。一人はステュルミル、二人目はソーラリン、三人目はヘルムンド〔・イッルガソン〕、四人目はスヴェラーのヤールンスケggi——これはエイナル・エイヨールヴスソンの息子——、五人目は東部地方はヴァープナフィヨルドのスケggi＝ブロッディ〔・ビヤルナソン〕、六人目はヘルガフェルのゲッリル・ソルケルスソン、七人目はボルグのエギル・スクーラソン、八人目はラウガルダルのソルゲイル・ハッルドールソンだった。この八人の男たちが相談をしたが、彼ら全員の間には、血縁や婚姻による密接なつながりがあった。この時彼らは計画を立てたが、それはステュルミルとソーラリンの説得とそそのかし、そしてオッドの財産を得るのに等しい金入手できる見込みが将来ともあるとは〔必ずしも〕はっきりしていないと彼ら二人が語ったことによるのであった。この問題の仲間になった者のうち或る者たちは財産が少なく、金が必要だと思っていた。しかし、他の者たちはすでに大きな財産を所有していたのだが、金を手に入れたがったのである。オッドの金が使われた以上、この問題ははっきりしたように見えた。こうして、首領たちは同盟を結んでお互いに助けあい、この件で〔オッドを〕追放刑に定めるか、或いは自己裁定(sjálfdoemi, 問題の裁定権を係争当事者の一方が得て、その裁定を他方が無条件で認めること)を獲得するかにすることにした。このことがこの民会では秘密にされたまま、人々は民会から帰っていき、オッドはその訴訟で面目を施こした。そうして、この年は過ぎていく。

今やオッドはしばしば温泉に出かけて行って、父親と会い、二人の親子関係は改まった。春の或るとき父子が会うと、オーフェイグが語った「オッド、何か消息をきいてるか」息子は答えた「何もきいてない」オーフェイグが言った「わしが耳にしたところでは、ステュルミルとソーラリンが召喚日に手勢を集めてここに来て、去年の夏にお前の金法廷に持ち込まれた件でお前を召喚するつもりらしい」オッドは言った「あの二人に対抗することは出来んことだとは思わない」オーフェイグが答えた「ことはもっと重大だとお前は思うようになるだろうよ。この問題では、多くの者が結託してるんだからな」こう言って、その者たちの名を挙げた。オッドは黙ってしまった。オーフェイグが訊いた「どんな方策があるだろうか」オッドは言う「民会に出かけて行って首領たちに援助を求め、金を渡すこと」オーフェイグが答えた「それは良い手立てだと思えん。この首領たちに対抗してお前を助ける者はひとりも出てこんだろうし、そう出来る者もおりゃせん。わしは、別の方法があると思う。それは、お前が自分の船の仕度をする事だ。その方がお前には適當だ。民会の時期に仕度をして遠くにいることだ、他の国に行け。だが、お前はわしの手金にいくら渡すことが出来るだろう。それをお前が、首領たちが奪いとるものよりも拙いことだと思わなけりゃな」オッドは言った「父さんに金をいくら取ってもらうよ。父さんが持

ってる方がまだましというものだ」こうして、父子は別れた。ステルミルとソーラリンは召喚に出かけるが、それについては何も話すことはない。この問題は大民会に持ち込まれた。

VIII. オッドは外国行きの準備をするが、首領たちは南部(のシングヴォル)で行なわれる大民会に向けて出発し、オーフェイグもステルミルやソーラリンの一行と共に民会に出かけるのだった。彼らとヘルムンドはそれぞれ(支持者の)一団を伴ってブラースコーガヘイズィ(黒林荒野)で出会い、そこでエギルとゲッリルたちも彼らの方に向かってやって来た。こうして彼らはその荒野を越えて南へ向っていった。スケッグ＝ブロッディとヤールンスケggiとソルゲイル・ハルドルソンは東のフィヨルドから来てレイザルムーリ近くで出会った。こうして、これらの一群はみんな、広原(大民会会場)の小舎の集まっている場所の土手で出会い、みんな揃って民会に乗りつけたが、ここでこれらの問題について大いに話された。首領がみんなオッドに襲いかかってくるからには彼は敗れるだろうと、誰もが思った。そして多くの者は、オッドがそのようにして敗れるのを嘆いた。

民会中の或る一日、大分遅くなった頃、オーフェイグは小舎を出て、ミューラー族の小舎に行った。エギルが(小舎の前の)土塁のところに出ていて、一人の男と話をしていた。オーフェイグはそれ(が終るの)を待って、エギルが小舎の中に戻っていかうとした時、彼のマントをつかんで言った「ご機嫌よう、エギルさん！」彼は相手に挨拶を返した。「腰をおろして、わしと話をして欲しいんじゃが」エギルは言った「わしたちは話をする必要などない。あんたは息子オッドの問題のことを話したいのだろうが、それについてわしと話す必要などない。この問題は、とうに全く見込みのないことだし、わしよりも他の者、ヘルムンドとステルミルの方が力をもっているのだ」オーフェイグが言った「オッドの問題について話すこと以外にも、多くのことをわしはお喋りや楽しみのために見つけられます。あなたと話すことは、ためになると思ってます」エギルは言った「あんたと話をすることは拒まんよ」こうして、彼らは腰をおろした。

オーフェイグが訊いた「農場をお持ちですか、エギルさん」「その通りだ」と相手は答えた。「ボルガルフィヨルドのボルグにお住まいで？」とオーフェイグが訊いた。「うん、ボルグだ」とエギルは言った。オーフェイグが言った「あなたについては立派なことが言われてる訳ですが、あなたは有力者で勇ましくて物惜しみをなさらんということですか。或る者たちに言わせると、あなたとわしは気性が幾分似ていて、どちらも大して金持ちじゃないが、自分の友人を援助することは立派なことだと考えてるそうですよ」エギルは言った「わしがあんたに似ているというのは光栄だが、わしが大して金持でないとあんたが言う点では、わたしたちの考えは大いに相違している。ところで、オッドはどれほどの金持かね？よく知っておられようが」オーフェイグが答えた「わたしたちが俸のことを話す必要などないと(さっき)言われたが、わしは俸の財産のことは知っています。[俸はアイスランド一の金持だと言われます。]だが、これ以上そのことは話さんでもいいでしょう。それとも、あなたは俸の財産をどれだけ分け前に取れるのか知りたいので

すかな」エギルは言った「それは大いに知りたいもんだ、ご老人」オーフェイグが言った「わしの考えでは、あなたはメルスランド（既出のメルに同じ）の土地を16分の1もらうでしょう」エギルは言った「それじゃ、あんたが言った程にオッドが裕福だとは思わんが」オーフェイグが言った「いいや、倅には財産はあり余るほどあります。その財産のうち、話したものをあなたは貰うでしょう。皆さんは、訴えの準備をしたので倅の財産の半分をご自分でとり、残りの半分は、法律にしたがって追放になった者の財産を所有することになっているフィヨルズング(ここでは北部地方)の住民が取るというように、話し合ったんじゃないのですか。もし皆さんお仲間が8人なら、あなたはメルスランドの16分の1所有することになると、わしは計算しますが。それとも皆さんが民会から帰っていった時にオッドが皆さんになぶり物にされるのをおめおめ待っていると、当てにしておられたんですか。今ごろ倅は自分の財産を全部かさらって海の上におることでしょうよ。土地は持っていかれませんがね。わしの見込みでは、皆さんが普通知られているよりもずっと速く行ったとしても、倅の商船は、あれを乗せて取返しのかかぬ位のろくは走らん筈です。倅は、自分がボルガルフイヨルドに行かねばならんのなら、ボルグまでそう長い海路ではない、と言っておりました。倅はお屋敷に行くかも知れませんな。あれがブレイザフィヨルドに行かねばならんのならヘルガフェルのゲッリルさんの屋敷を見つけるだろうし、また北部地方に行くならば、更にエイヤフィヨルドに行かねばならんのならスヴェラーまでは遠くないという事が自分の心に浮ぶとも、倅は言っておりました。倅は、ヴァープナフィヨルドに行かねばならんのなら自分はホヴの屋敷に行くかも知れんと語ってました。皆さんは公平な人間ではないですが、倅はよその国々では歓迎されると、わしは思ってます。皆さんは（もっと）適切に振舞うことです。皆さんは財産は全然手に入れないでしょうが、不面目は分け合いなさると考えられますな」エギルは言った「オッドに策があるのは嘘でないだろうが、この問題にかかわっている連中の中にわしが一番ひどい目にあわせてやりたいと思う男が一人いる。それはギルスバッキのヘルムンドだ。やつとわしとの関係は長いこと良くないのだ」

二人が話し合っている時、オーフェイグは金の詰まった袋をゆっくりとマントの裾の方にずり落してやるのだった。エギルがそれを見、これにオーフェイグが気づいて、マントの下に引っこめ、そして言った「ぼんやりしてなさるとは、どうしたんですか」エギルは答える「ぼんやりはしていない」「たしかに今は何のごまかしも下心もありません。皆さんの誰もが財産を手に入れそこなうのはお分りでしょう」とオーフェイグは言って、袋を振り回しながら引上げ、エギルの膝の上に袋の中味をぶちまけ、それを手につかんで彼に見せた——「ここに銀で二百ありますが、これをあなたに受取ってもらいましょう、あなたが倅の件で反対なさらんようになりますが。というのは、この問題で組んでいる人たちの中であなた一人が一番すきだからです。わしは知ってるんですが、あなたは非常に賢い人だ。ですから、他の人たちのように全然何も手に入れないことよりか、感謝のしるしになる物を受けとる方が、ご自分にとってましなことはお分りになるでしょう」エギルが言った「あんたは最悪の老人のようだ。あんたの金を貰ってわしが誓いを破る

とでも考えているのか」オーフェイグは言う「なさった誓いを破れとお頼みしている訳じゃありません。皆さんは、追放判決か自己裁定権獲得かの一つを実現すると話し合われたのじゃなかったんですか。そうならば、オッドの件について、同盟なさった皆さんが自己裁定権をお取りになるようにすることを、わしら（オッドの）身内の者は、認められることもあるんじゃないですか。そして自己裁定権が皆さんに渡れば、あなたが裁定をする必要だって起るかも知れません。そうになったらあなたは、どれだけ多く、或いはどれだけ少なくて決めると誓わないことです。あなたが決める時には面目が立つように加減できるでしょうし、その時にあなたはご自分の誓いをします。そして私の感謝をも受けるという訳です」

エギルは言った「あんたは全く食えない年寄だ。あんたの話したようになるようにして見るが、たった一人で他の連中に向う勇氣はないな」オーフェイグが答えた「わしが他の人をこのことであなたの仲間に入れられるとしたら、どうですか。そしたら、やる気はおありますか」エギルは言った「そうすれば出来そうだな」オーフェイグが言った「わしがみんなの中から選べるようにして下さい。ですが、わしはあなた以外はみんなひどい目にあわせてやりたいんです」エギルは言った「二人いる。一人はヘルムンド。これはわしと一番の近縁だ。だが、わしは彼を選ばんだろう。もう一人はゲッリル・ソルケルスソンだ。彼をわしは選ぶだろう」オーフェイグが言った「それならば結構です。それじゃ、わしはあの方に会いましょう。結末がどうなったかはお知らせします。この金はここに残して置きます」「そうしなさい」とエギルは言った。このようにして、二人は別れた。

IX. オーフェイグはゲッリルの小舎に行き、彼を外に呼び出してもらった。彼は謙遜な男であった。彼は外に出ていく。これにオーフェイグは挨拶して、自分はあなたと話をしたいと告げた。ゲッリルが言う「あんたはオッドの問題について話したいのじゃないかと思うが」「はあ」とオーフェイグは答えた。「オッドの問題についてよりかもっと楽しい話の種はいっぱいあると思います。息子の問題も以前なら今よりも面白かったんですが。賢い人たちと話をすることが、わしの一番の楽しみで、あなたは賢い方だと聞いております」ゲッリルが言った「オーフェイグ、話をすることをあんたに拒もうとは思わんよ」それから二人は腰をおろす。オーフェイグは語った「西部地方で、あなたが地区の有力者になる見込みが一番あると思いなさるのは、どんな男の人たちですか」ゲッリルが言った「あちらには優秀な人物が沢山いる。わしが第一に考えるのは、スノッリ〈ゴズィ〉の息子たちか、ソルギルス・アラソンの息子たちか、エイルの男たちだ。最後のはステインソールの息子だ」「いずれ劣らぬ名前ですね。あなたが一番いい結婚相手だと思いなさるのは、どんな女の人たちですか」「それも、同じ評判だ。わしはスノッリ〈ゴズィ〉かソルギルス・アラソンかステインソールかの娘たちを選ぶな。これらは、最も高く評価されている女たちだ」オーフェイグは言った「あなたは娘さんが何人かありませんか」「ある」と相手が答えた。「みなさん片づいてるんですか」「いいや」と相手が言った。「それはどうした訳です

か」とオーフェイグは訊いた。「それは」とゲッリルが言う。「家柄がよくて金持で立派な屋敷のあるような男たちが現われて来てないからだ。わしはと言えば、娘たちに持参財産を持たせてやれない程貧乏なのだ。わしだけがずっと質問されるのは止そう。北部地方で、あんたが有力者の見込みの一番あると思うのは、どんな男たちかね」。「あちらには優秀な男が沢山います」とオーフェイグが答えた。「わしは第一にエイナル・ヤールスケッギヤソンとアースゲイルサーのステュルミルの息子ハッルを選びますね。

倅のオッドは、重要な人物である者たちの一人に数えられると言われてます。わしがお会いしたらするようにオッドから頼まれた用件、あなたの娘さんラグンヘイズに結婚を申込みたいという用件をしなければ。ここに銀四百ありますが、これは娘さんの持参金になるものだと言っております。考えてもごらん下さい、他の誰があなた方に、あのような（立派な）男が自分で己れのところに嫁にくる女に持参金をやると申し入れるか。更にその上、倅は、あなたと自分が二人とも生きている間は決してあなたを粗末にしないとも言っています」ゲッリルは言った「わしが息子さんに娘を拒むことは（以前ならば）なかっただろうが、しかし、今いろいろと言われている問題が切迫している間、今のままでは、その話は実現しないだろう」オーフェイグが言った「この、何の値うちもない馬鹿げたことを言っておられるんですか」ゲッリルは言った「それがどうなるかは決っていないようだが、わしはこれに余り乗り気ではなかった。他の人たちの頼みや願いを聞いてしたことだ」オーフェイグが言った「あなたがこの財産の横取りから利益を得ようと思いなすっておられることは、あなたが裕福じゃない以上、同情できることです」ゲッリルは言った「みんな、そう思っているんだ」オーフェイグが言った「あなたが財産をどれだけ貰うようになるか知りたくないですか」「とても知りたいと思う」とゲッリルは答えた。「教えてくれ」オーフェイグが言った「皆さんはメルスランドを半分所有することになりましょう。それだけじゃ余り沢山の財産にはならんでしょう。ところで、皆さんは不面目な振舞いをしておられるが、オッドが〔今ごろメルの土地を除いて自分の財産を残らず持って〕海に出ていて、よその国国では歓迎されるということは、大いにあり得ることです」ゲッリルは言った「ならば、それには裏がある。だが、それは本当のようだし、いくつかの点で巧妙だな」オーフェイグが言った「倅はこう語ってました。あれがブレイザフィヨルドに行ったらお屋敷を見つけることは無理じゃないし、あなたは易々と屋敷に戻れないだろうって」ゲッリルは言った「わしは、そんなことは恐れはしない」オーフェイグが言った「しかしあなたは、このオッドの問題がどうなるにせよ、わしが話したように、この問題からは名誉や財産じゃなくて他のことしか得られそうもないってことが、お分りになるでしょう。わしの望みたいのは、あなたがこの金を受取って、この問題について考え、あなたとこの問題に関わった他の人たちの取り分がどれだけ違うかご覧なさることです。くり返して言いますが、あなたと倅の二人ともが生きている間あなたは決して金に困ることはないし、とっても立派な義理息子をもつことになるのですよ。だからといってご自分では何も言わなくて良いんですよ」

ゲッリルは言った「あんたの話していることはもっともだ。また実際にも、あんたの言うことと余り違わないだろうと思うが、わしはこれまで一度も裏切り者だったことはない。わしは同盟の仲間に、この件で追放判決か自己裁定以外の何物にもしないという誓いをしているのだ」オーフェイグが言う「あなたがその誓いを破るのではなくて、問題があなたの裁定に委ねられるようにと頼んでいるんです。そしてわしたち身内は、皆さんに自己裁定権が渡される方を選べるようにすると決めました。皆さんはわしたちに罰金を払わせたくないほど意地悪じゃないでしょうし、そうしたら、俸は追放にならずに済むんです。もし希望通りになって問題があなたに委ねられたとしたら、その時は、あなたは不面目な振舞いをせずに、誓いを守って男らしさを示すのです。そうしたら、あなたはこの金を手に入れて、娘さんのために面目を施こしなさい」ゲッリルは言った「あんたは賢いぞ仁だ。だがわしは、この問題に関わっている他の者たちみんなに自分ひとりでは反対できん、気持はそうしたいのだから」オーフェイグが言った「わしが他の人をこのことで仲間に入れられたら、どうですか」「そうだったら、出来そうだ」とゲッリルは答えた。「誰を選びますか」とオーフェイグは言う。「わしがどんな選択でも出来るとして下って結構ですよ」「誰よりもエギルを選ぶよ。〔わしに一番近い男なのだ。〕」オーフェイグは言った「あなたが、このことで最悪の人を選び出して、財産を手に入れるために何をすべきかを考えないと、残念ですね。でも、あの人は大変賢いから、面目を全然ほどこさないよりか少しでも施こした方が当を得ていること位はお分りになるでしょう」ゲッリルが言った「あんたが彼をこのことで仲間に入れたら、わしはやって見るが」オーフェイグは言った「じゃ、出かけて行ってエギルさんに会いましょう。わしがあの人に承知させたら、お二人は教会のそばで話をするということにして下さい。お二人の一行の皆さんはお互いに近くにいます。ですから、お二人がしょっちゅう話をしても奇妙だと思う人はいないでしょう。その時にお二人で手立てを決めて下さい」こうして二人は別れ、オーフェイグはエギルに会い、この件はオーフェイグが目論んだようになっていく。

X. 翌る日オーフェイグは橋を渡って行って、自分の身内のスカルズの者たちに会い、自分といっしょに法の岩に行くように頼むのだった。彼らはそうした。人々が自分の問題を語り終ったとき、オーフェイグが立ちあがって言った「わしは俸のオッドの問題についてこれまで余り言わなかった。しかし、何か和解にできることがあれば、やってみたい」ヘルムンドが言った「この問題であんたと和解することは全くない」オーフェイグは言った「では、和解は問題になりませんね。ですが、あれの身内たちに、追放判決か自己裁定権か、どちらにするか選ばせてもらえませんか」〔ヘルムンドが答える「わしたちは自己裁定権以外は何も得る気はない」〕「身内のものたちは、自分らの望む人たちを皆さんの中から選ばせて貰えますか。それとも、滅多にないことですが、皆さん全員がそうするのですか。〔一人の者が一つの問題で八人の者に自己裁定権を認める例は、ほとんど知られていないことだと思います。普通は、一人の者が一人の者に認めるものです。しかし、この問題は他のことに比べてはるかに例外的に進んできています。それ

で、わしは皆さんの仲間の二人が裁定することを提案したいと思います。]」「そっちで望む者を選ばせてやる。わたしたちの側の者の中から誰と誰が選ばれるかは重要だと思わん」オーフェイグは言った「それでしたら申し分ありません。わたらの手立ては、俾が追放に定められない方を選ぶことになります。皆さんの望む人たち（裁判官）は自発的に握手によって確認（handsal）を行ない、皆さんは訴えの取下げを握手によって確認して下さい。そちら側の人たちの中からわしは、自分が適当だと思う人を選びます」ヘルムンドが言う「そのようにしたらいい」〈賢者〉ソーラリンが言った「わたしたちは、明日になって後悔しないことに、今日同意しよう」ヘルムンドは答えた「わたしたちはこれに賛成しよう。」「では、握手で確認しましょう」とオーフェイグが言い、そして握手が交され、彼らはその訴訟の取下げを確認した。

オーフェイグは、自分が選ぶはずの者たちが望むように金を支払うことを確認した。そしてオーフェイグが言った「さあ、広原に上っていきましょう。あっちでわしは、自分が適当だと思う人たちを選びます」彼らは、そのようにした。広原には大勢の者が集まっていた。ゲッリルとエギルの二人は、自分たちの支持者の団をつれて一緒に広原に上ってきた。その時オーフェイグは語った「同盟の方々、車座にすわって下さい。わしは皆さんの前を歩きながら、自分が適当だと思う人たちをわしの問題を扱うひとに選びましょう」彼らはそのようにした。オーフェイグはステルミルのところに行って、マントを両肩のところで上げて背の方にずらし、膝をついて言った「わしはあなたのスィングマンであるし、立派な贈物をあげたりしてきたので、わしがあなたをわしの問題を扱うひとに選ぶことは有りそうだと皆なは思うでしょう。また、あなたが扱ったら、問題はいい結果に終るといふ事もあるかも知れませんか。だが、あなたは（自分のスィングマンである、このわしの利益保護について、わしから贈物を受けとるのと）同じ程度に熱意を示してくれなかったし、今の問題については、俾にとって容易になるよりか困難になるような原因という原因をひき起しなすった。だから、わしはあなたを選ばない。ソーラリンさん、あなたはそこに坐っておられる。皆さんがこの問題を仲裁する分別に欠けることはないのだが、〈賢者と呼ばれる〉あなたはこの問題が俾のオッドにとって以前よりも面倒になるように、自分の分別の限りをつくしなすった。だから、わしはあなたを選ばない。ヘルムンドさん、大豪族のあなたはそこに坐っておられる」それからヘルムンドは大いに称賛されて、オーフェイグが彼を選ぶように思われた。「確かなのは、金欲と不公平と不正以外の何物もあなたをしぼりつけていないという事だ」とオーフェイグが言った。「あなた程に（この問題で）気違いじみていた人は誰もいない。あなたは、財産に困ってもいないのに、金欲のために加担してきた。わしはあなたを選ばない。ヤールンスケッグさん、あなたはそこに坐っておられる。わしは、あなたが北部のヴォズラスィングで国王たちのようにご自分の前に旗をかかげさせたと聞いています。あなたがこの問題から名誉を得るのなら、あなたの自尊心はどこに行ってしまうのか、わしには分らん。だから、わしはあなたを選ばない。またわしは、あなたが浴びるようにふんだんに名声を得はしないという運命をあなたに予告せざるを得ん。スケッグ＝ブロッディさん、あなたはそこに坐って

おられる。(ノルウェーの) ハラルド〔シグルザルソン〕王が〔あなたが王のもとに滞在していた時〕、あなたがアイスランドの国王になるのが一番いいと語ったという話は本当ですか。』相手は答えた「わしは知らん。ハラルド王はわしに多くのことを語っておられたが、それがどこまで真剣だったのか、わしは知らん。』オーフェイグが言った「そうとしても、あなたがアイスランドの王さまになることに、わしは賛成しない。あなたがこの問題に対して王さまになりはしないようにね。だから、わしはあなたを選ばない。ゲッリルさん、あなたはそこに坐っておられる。あなたは立派で正しい首領だと言われている。しかし、この問題はあなたにとって立派でない事になったが、あなたが貧しいからには、同情できる余地がある。もう一つ、あなたの友人のスケグ＝ブロッディさんがこの問題に関わっていた事もあるので。どの問題でもわしには大した事じゃないのだけれども、いずれどこかに、わしは向わなければいけない。わしは、あなたを選ぶことをしない。けれども選ばないこともしない。ソルゲイルさん、あなたはそこに坐っておられる。あなたの前にわしは長く立っていない。というのも、あなたはいささかでも重要な問題を仲裁したことは一度として無かったから。その分別が、あなたには無いからですよ。』エギルの前にくるとオーフェイグは、周りを見まわしてマントの頭巾を動かしながら言った「わしにとっては狼の例のようになるようだ。狼どもは互いに食いあって尾っぽだけになるまで、互いに気づかない。今わしもそうってしまった。わしはここで多くの立派な方々の前に行ったが、その人たちをわしの問題を扱う者として選ばなかった。今は、金を得るためなら何をも辞さないということを知らない者のいない人ひとりが残っているだけだ。エギルさんだ。今となっては、することは二つに一つだ。戻って行って、前に選ばなかった人たちを選ぶことにするか、いい結果にならないだろうと誰でも知っているあなたを選ぶことにするか。だが、やっぱりあなたを選ぶ方がいいと思う。』相手はさっと立ちあがって言った「よくあることだが、名誉は向うの方にいこうとしてる。そして、他の者たちはわたしたちに与えようとしないのだ。ゲッリル、わたしたちは行こう。そして、この問題について考えよう。』彼らはそうした。

エギルが言った「わたしたちはどうしたら良いのだ。わしがいいと考えることは、わたしたちが少額の仲裁をすることだ。というのも、わたしたちが少しに決めなければ、(わたしたちには) 儲けにならんだろうからな。』「だが、敵意はのしかかってくるだろうな」とゲッリルは言った。「それをどれだけの額に決める?」エギルが答えた「〔悪い金で〕13エイリルにしよう。』ゲッリルは言った「わしは仲裁内容を発表する気はないぞ。』エギルが言った「あんたは調停を発表したいのか、それとも質問に応答したいのか。』「いいや、わしは仲裁内容を発表する方にしたい。応答の方はあんたがやってくれ。』

彼らは、(前に) 坐っていた所に戻っていった。ヘルムンドが立ちあがって言った「わたしたちは不名誉を聞こうじゃないか。』するとゲッリルが言った「〔わしらが銀で〕13エイリルにする事が、オッドに対する裁定だ。』ヘルムンドは言った「わしは聞きまちがえたのか? あんたは13エイリルの百倍に決めたのだろう?」エギルが答えた「あんたは立ちあがった時、耳をふさいでいたので

はないのか。哀れな者だけが受取ったり支払いを受けたりする13エイリルだ、砕いた指輪とがらくたの宝物だ。」するとヘルムンドは言った「わしたちは裏切られたのだ。」エギルが言う「あんたは自分が裏切られたと言うのか」「そうだ」とヘルムンドは答えた。「わしは自分は裏切られたと思う。あんたがわしを裏切ったのだ、この裏切り者め。」エギルが言った「わしは、自分が一番いいと思う通り、誰をも信じない者を裏切るのだ。あんたは誰も信じない。自分の友人も身内をも、子供たちも奥さんも信じない。あんたは自分自身さえ信じない。それで、自分が霧の中に莫大な金を隠して、それがどこにいつてしまってるのか、自分の方が他人よりも分らないまでに、あんたは自分を信じてないのだ。だが、今あんたは別のことをしようと思って、その金をまた欲しいと考えているのだろうか、もうそれは見つけられないぞ。」ヘルムンドは答える「これも他の多くのことと同じように、あんたの嘘だ。あんたはいつも嘘をつく。この前の冬にわしがあんたを、あんたら全部で7人を、あの惨めな家からわが家に招待した。あんたらはギルスバッキに滞在した。そして、[春になって復活祭の後ボルグに]帰るとあんたは、[わしにとって]外に放し飼いにされていた馬30頭がいなくなって、みんな食われてしまったと語ったものだ。」(馬肉を食べる事はキリスト教採用後、公けには禁ぜられた)「誰も、あんたの損害について実際あった以上のことは言わんだろう。それでも、数頭食われたか、一頭も食われなかったか、この二つのどちらかだとわしは思う。」ヘルムンドは言った「わしら二人は次の夏そろって民会に出ることはないぞ。」「わしは、言わないで済ませられたらと思っていたことを言おう。それにしても、あんたが何ひとつ言わずにいたらなあ！[年をとって死ぬことがわしについて予言されたが、トロル(超自然的な巨人の類)があんたをとつつかまえる前に、死んだ方がましだと思うよ。]」

この時ステルミルが言った「予想通り、わしたちにとって、一番悪い男を仲間にしたのはまづかった事がはっきりした。こいつはこの国で最悪の男で、これは誰でも知っていることだ。」エギルは言った「あんたがわしのことを悪い男だと言えば言うだけ、それだけ良い。あんたがわしを自分と同等な者だと考えていた事をみんなが知っているからな。最悪の男を自分と同等な者だと思える事をあんた自身が値うちのあることだと思ったのは、あんたにとってはえらい恥だろう。他の者たちは知らない恥かも知れんが。それでも、幾つかの点でわしたちは同等でない。あんたは食物について大変なけちだ。あんたにはマトセールという腕があるが、その中に何が入っているのか、あんた一人以外知っている者がいない位で、多くの立派な人があんたのところには一度も来たことがない。さらに、戦斧が空中に舞う途端にあんたが逃げ出すことは、みんなが知っている。しかし、わしは何かして自分の友人に援助を与えるぞ。あんたとわしの二人とも苦しい暮しをしているという事は全くありそうも無いことではないが。」

すると、ソーラリンが立ちあがろうとするが、この男は体がとても肥えていて重く、(立ちあがるため)自分の膝に手をつけて支えにする。この時エギルが言った「坐れよ、ソーラリン。わしはあんたに、民会に来ている者がみんなしてあんたのことを笑うと答えられるからな。」相手は坐った。そこでエギルが言った「あんたはいつものように今も賢く振舞っている。あんたが火のそ

ばに坐って自分の両ひじをさすっていても若者どもがあんたを笑うことはなかろうて。」

すると、ソルゲイルが言った「13エイリルに決めることは馬鹿なやり方だ。」エギルは言った「わしは思うんだが、あんたには、これは立派に決められたと思えるはずだ。あんたは、自分が東部地方のアールネスの秋期民会でぶんなぐられたことを忘れたのか？どっかの馬丁があんたをぶんなぐって、こぶが13あんたの頭に出来、あんたはこぶ一つあたり子羊のある雌羊を一頭うけ取った。」

その時、スケッグ＝ブロッディが言った「ヤールンスケggi、わたしたちはここから出ていって、やつとは言葉を交さんようにしよう。」そうして彼らは行ってしまい、続いて皆もそうしたが、金はそのまま置いていかれ、受取ろうとする者は一人もなかった。そして、彼らの間には敵意が生まれ、こうして民会は終わった。

XI. オーフエイグは北に行って、息子のオッドに会う。その時オッドはすっかり準備ができていた。彼は、問題がどんな風になったか尋ねた。「わしは彼らに自己裁定権をやった」とオーフエイグが答えた。オッドは言った「父さんは、問題にだれよりも惨めな結着をつけた訳だ。」オーフエイグが答えた「息子よ、そう急いだ判断をするな。」そうして、息子にことの顛末をすっかり話してきかせた。「わしは、このことがそんな風になろうとは考えられなかった。父さんは一番いい報酬を受けて当然だと思うよ」と息子は言った。オーフエイグは言う「おまえたちの婚礼は、このメルで夏の終る6週間前に行なわれることになっている。」オッドが言った「これは、わしが一番望んでいたように解決された。けれども、わしは交易航海をつづけて、自分がどれだけ旅運のいい者になるか、また決められた時に戻って来れるか見てみよう。」オーフエイグは言った「お前がそうするのを止めることは出来ん。おまえは旅運にめぐまれていたからな。」

〔そのあと父子はむつまじく別れ、〕オッドは順風に船を出して北のソルゲイルスフィヨルドに向けて船を走らせるのだった。そこで風が屈いで、そのため彼らは数夜そこに船を停めた。そこには（他の）商船も入っていた。ここでオッドは退屈し、（乗組みの者に）陸まで舟を漕いでいくように命じ、彼らは一つの高い山に上った。オッドには沖の方では天気が違うように見えたが、フィヨルドは穏やかだった。その時オッドは、船〔に帰って、これ〕をフィヨルドの外に漕ぎ出すように命じた。商人たちは、長い時間をかけなければ大洋をこえては行けないだろうと話した。オッドが言った「わたしたちが船を漕ぐことをあんたたちが馬鹿ばかしいと思うと同じように、わしは、あんたたちがここで春を待つことだろうと思うよ。」彼らは〔フィヨルドを出ると〕順風を受けてオークニーに向い、途中で帆を下すことなく進んでいった。〔オッドはそこで麦芽と穀物を買ひ、〕彼らはそこに数週間とどまった。そのあと追風に乗って帰国し、（前に挙げた）商人たちは、オッドたちの戻ってきた所に停泊したままだった。〔西に〕船を進めて、ミズフィヨルドに来るまで停まらなかった。

オッドは屋敷に向い、そして非常に豪華な祝宴の仕度をする。それには何ひとつ欠けるものは

無かった。そこにゲッリルが娘をつれて現われた。また、エギルと大勢の人がやって来た。祝宴は、友人たちが望んだように進んだ。しかし、エギルは陽気ではなかった。オッドは客たちに立派な贈物をして帰ってもらう。その時オーフェイグが言った「わしは、おまえが礼儀をつくしてエギルに帰ってもらうようにして欲しい。わたしたちはあの人にたっぷり礼をしなければいけない。」オッドが言った「父さんがもう、あの人に送別の挨拶をしたと思うが。」オーフェイグは答えた「そうではない。彼に申し分のない面目を施こしてやれ。」次の日オッドがエギルに言った「わしはフルータフィヨルド沿いに屠殺用の羊40匹と牡牛2匹を追ってやらせましょう。それはあなたより前に向うに着いてます。あなたとわしが生きている間は、あなたを丁重に扱わさせても頂きます。」エギルは彼に礼を述べ、その眉を開いた。ゲッリルはエギルに贈物を十分に贈った。そこで彼らは別れた。

XII. その冬も過ぎて春になり始めた頃、ヘルムンドはフウアムの民会場に行く。そして、外国に出かけようと考えた時かれは、自分の一行は引き返して（南の）ボルグに行つてエギルを家の中に閉じこめたまま焼き殺すのだと言った。ヴァルフエルに來たとき彼らは、峠で弓の弦の音がするように思った。その途端、ヘルムンドは腕の下に激痛を感じた。こうして、彼らは家に引き返さざるを得なくなつてしまつた。ヘルムンドは脇腹も痛み、彼ら一行がその地方を進んでいくにつれて熱が高くなつていった。彼らはホッグヴァンダスタズイルに來た。そこは、一面鵞におおわれていた。そしてヘルムンドは自宅に着くと、床に寝かされ、レイキャホルトの神父ソールズ・ソルヴァソンのもとに人がやられた。神父がヘルムンドのもとに着いたとき、彼は話すことが出来なかつた。そして神父が（帰ろうとして）自分の馬のところに出來た時、迎への人を寄こされて、彼は再び（病人のもとに）行つたが、神父はヘルムンドと話が出來なかつた。そうしてから神父は（帰路について）峡谷まで來たが、その時三度目の迎へがとんで來た。神父が（ギルスバッキに歸つて）ヘルムンドの方に身をかがめて、彼が唇をふるわせながら言うのを聞いた「峡谷に五(百の銀)、峡谷に五(百の銀を隠した)」それから、彼は息をひきとつた。

〔今やオッドは屋敷に落着いて豪勢に暮し、妻を深く愛した。この間、オースパクについて何ひとつ聞かれなかつた。〕 マールという名の男がいたと言われている。彼はスヴァエラを妻として一緒に暮らしていた。彼の兄弟はオルヴィルといつて、愚かな男だつた。ある朝、マールとスヴァエラが寢床の中にいた時、そこに大きな男が入つてきて、〔これはオースパクだつた〕 次の詩をいふた。

おれは鞘からひき抜いた
研いだばかりの短剣を、
それをばおれは突きたてた
マールのどてっ腹に。
おれは許さぬ

ヒルドの息（マール）に、
美人に育ったスヴァラの
かいなの中にいだかれて寝ることを。

そして剣をマールに突き刺した。その男が外に出ようとした時、オルヴィルがとび出して、男に大きなナイフを突き刺すのだった。或る朝のこと、オースパクに対する訴えの要旨が説明された屋敷に人々が集まった。そこでは、12頭の牛が傷つけられて死んでいた。オーフェイグの息子オッドも、雄馬を7頭殺された。オースパクはリーナクラダルの或る洞穴の近くで死んでいるのを発見された。その脇には手洗い用のたらいが見つかり、べっとりと固まった血がその中にあった。（オルヴィルの与えた）傷と飢えが彼の命とりになったのだ。

オッドは有力者になっていて、オーフェイグという息子を持った。ここから余り時をおかずにスノッリ・カールヴスソン（1175年頃没）や（他の）ミズフィヨルド一族が出ているとのことである。

ここでこのサガは終る。

（完）